

演者は、摂食障害患者治療に携わる中で、母子間の絆の極めて重要なことに気づくとともに、母子間のスキンシップを含めた「再養育療法」の効果発現の機序を探っていた。その中で、ホルモンおよび神経伝達物質として、脳のさまざまな領域につながる神経ネットワークを介して作用するオキシトシンの働きに興味をそそられた。オキシトシンは、1906年英国の研究者ヘンリー・デールによって、下垂体後葉から放出される出産の経過を加速する物質として発見された。アミノ酸9個からなるペプチドで従来の概念を超え、生物にとって大切な働きを持ち、とくに「安らぎときずな」、「信頼と好意」を促進し、精神活動を制御する物質として注目をあびている。オキシトシンの作用は、成長や生殖について多岐にわたるが、精神や行動に与える影響が特筆される。母性行動の促進、不安の減少、好奇心の増強、痛みの感覚の減少など、情緒の安定や心を癒す働きがある。また、人間関係、とりわけ母と子の間の心の絆である「愛着」に密接に関連していると推測されている。すなわち、種の存続は、母と子がお互いを識別し、結びつきを維持する能力にかかっている。人間の祖先が適応しなければならなかった自然環境には、捕食動物の群れやその他の致命的脅威が存在していたため、乳児が、保護してくれる人物から離れて何時間どころか何分も生存することなどありえなかった。そこで、生存および生殖の確率を高めるために、ボウルビィが愛着行動システムと呼んだものが、進化によりデザインされた。それだけに、愛着システムは、摂食や交接と同じくらい遺伝的にプログラムされた人間的構成要素と言える。実に、愛着システム、生殖、摂食による満足感のいずれにも関連する物質がオキシトシンである。オキシトシンは満腹感を意識し、心身をくつろがせるための体のシステムに重要な役割を果たすため、摂食障害の治療法として、患者および母親のオキシトシンシステムを活性化させる可能性の高い「再養育療法」がもっとも本質的なものと考えている。